

大正大礼と京都府

戸田 文明

要約

明治天皇の死は国民に大きな衝撃と喪失感をもたらした。しかし新たな天皇の即位には、日露戦後から進行していた社会の閉塞感を払拭するという期待と解放感も存在した。即位礼が行われた京都府の史料『大正大礼京都府記事 庶務之部』(上・下)を検討し、大正大礼の準備の実態と大礼関係諸行事を明らかにし、大礼のもった意味を考察する。

キー・ワード…明治啓蒙思想 信教の自由 政教分離 「教門論」 神道国教化政策

はじめに

一九一二年七月、明治天皇の死去にともない、大正天皇が践祚した。「幼冲の天子」から「大帝」という明治天皇の歩みは、「半開」国から世界の「一等国」という近代日本の発展とオーヴァラップしており、その結果、明治天皇は日本近代化の象徴と目され、その偉大さが内外に喧伝されることとなったのである。それ故、「大帝」として君臨した天皇の死が同時代の人々に大きな衝撃を与え、巨大な喪失感を覚えさせたことは、当然であった。

夏目漱石の作品や徳富蘆花の日記などには一つの時代の終焉として描かれている。しかし、終焉は同時に新たな始まりでもある。「明治大帝」の死は、人々に一種の解放感をも与えたものではなからうか。すでに日露戦後から顕著になっていた都市化と社会の大衆化、そして日本資本主義の行き詰まりの中で、石川啄木は「時代閉塞の現状」を訴えていた。「偉大な天皇」は近代日本の栄光の象徴であるとともに、「時代閉塞」と抑圧の象徴ともなっていたのではないか。「明治大帝」の死は一つの時代の終わりを実感させ、多くの人々に大きな衝撃と喪失感、そして不安感を生じさせるとともに、新たな時代の幕開けをも期待させたといえよう。こうした国民の不安と期待の中で誕生したのが大正天皇であった。国民と苦楽をともにし、近代日本を形成し、その栄光を一身に担ったという意味でのカリスマ性を、新たな天皇に期待することはできない。また、政治的にも未知数の多い天皇ではあったが、新しいという意味では、ヨーロッパ式の教養を身につけた若き天皇に対する期待は、不安が交錯しつつも、大きかったといえよう。

明治大帝とは異なる形での国民統合のシンボルとなり得るか否かは、政治状況の混乱の中で、新しい天皇と政治にとって最大の課題であった。本稿は大正大礼の行われた京都府の対応を検討し、大正大礼の狙いを明らかにすることを目的とするものである。

第一節 京都府の大札準備

すでに述べたように、大正天皇の踐祚は一九一二年七月である。しかし、即位の事実を内外に知らしめる大規模なデモンストレーションである即位大札（註1）は、大嘗祭とともに、一九一五（大正四）年十一月、京都で盛大に举行された（即位大札は一〇日、大嘗祭は一四日）。即位大札は前年十一月に行なわれる予定であり、そのための大札使も設置されていたが、一九一四年四月、昭憲皇太后が病死し、登極令の規定で服喪のために延期されたものである。

この大札は、一九〇九（明治四二）年に公布された登極令による最初の即位礼であり、以後の大札の「軌度」となるものと位置づけられ、国民意識を総動員するよう、周到な準備の下に举行された。

中央においては、昭憲皇太后の服喪期間終了を待つて、一九一四年四月一二日に登極令第五条に基づき、勅令を以て大札使官制が發布され、大札使総裁に伏見宮貞愛親王、同長官に公爵鷹司熙通（侍従長）が任命され、以下、御用掛、次官、参与官、事務官などが任命され、一九日には官報号外に大札期日が発表された。

総裁の伏見宮は再任である。さらに、九月二〇日には、大札諸儀の日取りが発表された。その内容は、十一月六日の京都行幸（東京駅出発、名古屋一泊後、七日京都市）から始まり、一〇日の即位礼、一四日の大嘗祭を中心に、即位礼後の大饗、伊勢神宮、神武天皇陵、明治天皇陵などの親謁を挟んで、十一月二七日の東京

還幸、三〇日の皇霊殿神殿親謁におわるものであった。その間、大札が举行される京都を中心に、伊勢・奈良など三週間にわたって天皇以下の皇族・政府高官が関西に滞在することとなった。また、両院議員も大札に出席するため、一時的ではあれ京都に滞在することとなった。そのため、政府機能はおよそ一ヶ月にわたって京都に移動する。京都府庁内には、内閣会議室や大臣室がしつらえられ、政務を執る準備もなされていた。

京都府の準備体制

すでに述べたように、もともと前年に举行される予定であったものが、延期されることとなったため、準備は水面下でも行われており、時間的にはむしろ余裕が出来たといえる。とはいえ、受け入れ側の京都府が準備と実施に忙殺されたことは言うまでもない。

即位式と大嘗祭の式次第は登極令（附式）で詳細に規定されているが、実際の举行にあたっては京都府がその実行面を担当することとなった。京都府の準備状況については、『大正大札京都府記事 庶務之部 上・下』（以下『記事』上、『記事』下と略す）に詳細な記録が残されている。本稿では、この記録によって、大正大札に際しての京都府の対応をみていく。

中央に於ける大札使任命に関わって、京都府関係では、大森鍾一府知事が大札使参与官に、内務部長堀田眞、警察部長長田秀次郎が大札使事務官に、技師一井九平、斉藤勝蔵が事務嘱託に任ぜられている（『記事』上、三頁）。七月に入ってから、京都府に於いても、事務処理規程・委員服務心得が作成され、庶務係、工営係、接待係が設置され、四五〇人あまりによって分掌された

(『記事』上 五〇一六頁)。その内訳は左記のごとくである。

庶務係 係長以下六名

第一組 奉送迎、拝謁、献上品、典儀

第二組 拝観人ノ取扱

第三組 府治一斑ノ編纂、

記念印刷物等他ノ主管ニ属セル事項

第四組 記録編纂

第五組 通信報告、天気予報

第六組 御用品其他ノ調達及運搬、一般調度

工営係 係長以下二名

御苑内設備係

駅派出所設備係

警備ニ関スル設備係

御堂筋係

接待係

京都駅前派出所詰

宿舎訪問

宴会

新聞記者室

嘱託委員

補助員 知事官房

庶務課

土木課

会計課

社寺課

学務課

林務課

農務課

商工課

権土課

警察部

二名

二名

五名

一名

四名

三二名

こうした大所帯になったのは、大礼儀式の準備だけではなく、行還幸の道路の改修・拡幅、大嘗宮造営はもちろん、造営のための用材の調査や調達、また運搬路(道路・鉄道・駅)の修営・整備なども京都府が担当しているからである。基本的には政府からの支出であったとはいえ、人員的にも資金的にも京都府にとって莫大な負担であったことは疑いない。

準備態勢が整った七月以降、大礼準備は急ピッチで進められていく。

大礼準備

まず、交通体制である。京都市内に於ける天皇の行動範囲は、京都駅・京都御所・二条城を結ぶ烏丸通り、丸太町通り、堀川通りなどであるが、それ以外に天皇陵への親謁もおこなう。また、各郡からの用材調達の道路も整備しなければならない。大礼にあたって整備された道路とその費用は左記の如くである(『記事』上 一七〇二二頁)。

伏見兵衛街道

大礼後の桃山御陵親謁の鹵簿の通行のため（実際は汽車による行還幸であり使われていない）

工費

一八〇八二円〇五錢三厘

土地買収費・物件移転料

一九六三六円二九錢七厘

計

三七七一八円三四錢九厘

加茂停車場道

和束郡・湯船村の用材運搬のため

工費

二五八三円七七錢九厘

土地買収費・物件移転料

一二七四円七五錢四厘

計

三八五八円五三錢三厘

郷ノ口街道

綴喜郡からの用材運搬のため

工費

六三六円

土地買収費・物件移転料

一一四〇円五三錢七厘

計

一七七六円五三錢七厘

天皇の鹵簿の通る烏丸通りや丸太町通りには行幸当日には白砂が敷かれたが、こうした準備も、大礼使と相談の上、京都府が主管している（『記事』上、三二二頁）。

また、道路以外にも、工営係の主管で、御苑内の設備、市や府職員の駅前派出所などが新築・整備されている（『記事』上、三一八・三二九頁）。また、臨時内閣や内務省のための各室の設備（閣議室・総理大臣室・各大臣室・書記官室など）が府庁内に設けられている（『記事』上、三二二頁）。

用材その他材料の調達

御苑内の設備として最も重要だったのは、大嘗宮、悠紀殿・主基殿であり、これらは、今回の大礼のために、新築され、材料調

達は、大礼使での決定を受けて、京都府に命じられた。それぞれ、旧和束郷・田原郷・小野郷・山国郷などの古来朝廷に用材を納めてきた由緒郷に分担する予定だったが、規格に合う用材が不足し、由緒郷以外の出願郷にも供出を命ずることとなった（『記事』上、二二頁・二三頁）。用材の調達に際しては、細心の注意が払われ、三次に及ぶ調査（規格だけではなく、価格や運搬費用などについても数次の協議を行なっている）の結果（『記事』上、二四・二八頁）、丸太（松・杉・櫟）・萱・萩柴・竹・葭簣など二五〇〇〇円にのぼる大量の用材が購入されている（『記事』上、二八頁）。

用材の調達に際しては、古来の風習に従って、搬出する村々に絵符が下賜されている。この絵符は、用材運搬の際車両の先端に貼り付けるものである。また、用材搬入時には、酒肴を下賜する慣例があったというが、その代わりに「聖旨」によってわずかであるが関係各村に酒肴料が下賜されている（京都府全体で一五〇円）。さらに、調達関係者に対しては、紫宸殿、大嘗宮、二条離宮、饗宴場などの特別拝観も許されている。こうした「特別待遇」は関係者にとって大きな名誉と感じられたことであろう。

用材切り出し・運搬などは、各村落の青年会が中心となっており、用材調達の用命を受けた各町村では、それぞれ調達規約を定め、調達委員を設け、各町村の氏神の前で奉告祭を行ない、さらに切り出す際には山ノ口祭を行ったり、伊勢神宮に参向するなどしている。調達規約では、従業者に対し、「清浄」を求め、忌服者や病者（家族に病人がいる場合も）は解雇する、などの規律を求めている。用材調達もまた一種の祭礼として位置づけられているといえよう。

運搬もまた、一種の祭礼行列であった。和束郡を例にとつてそ

の様子を見ておこう。和束郡の場合、用材は加茂駅に集められ汽車で梅小路駅に搬出される。梅小路駅からは荷車で、京都御所に運ばれる。先頭には、村旗・万歳旗・高張り提灯、さらに指揮係長（村長）・役場員・信号旗手・伝令・医師が続き、その後ろに四両（四両に一名の委員、二両に一名の人夫頭、各車両に四名の人夫）を単位として一三組五二両の牛車が続く。行列は整然と都大路を進むが、その間、各郡毎に作られた記念唱歌が歌われる。その内容は、

- 一、今年やめてたい コイコイ 登りの秋に コイセー、コラセー、あふきまつるよ、高御座。ソリヤートコセー コイヤナ、アレハイナーコレハイナー、コリヤコイトセ
- 二、遠き御代より 御用の命を かしこみまつる 和束郡。
- 三、千載一度の 宮木の運び 謡いはやして とともに。
- 四、納めまつるは 松、杉、櫟、萩、黒文字、菅、躑躅。
- 五、めてたやめてたや、この大御代を 祝へ祝へや、万々歳。

というようなものであり、古来からの朝廷との親近性を述べ、天皇統治を言祝ぐというものであり、各郡大同小異のものである（『記事』上、五八―六一頁）。

用材以外にも、食料や什器などの調達は当然京都府の管轄であった。儀式に使う様々な什器や衣服もまた、京都府下を中心に調達されている。製作者（商工組合や個人）に対して用材調達と同様の儀式張った製作・納入が指示されている（『記事』上、九二頁、一〇一頁）。さらに雑役人夫（愛宕郡・葛野郡・宇治郡）や駕輿丁（八瀬）の選定についても、厳格な審査が行なわれている。

準備過程と民衆

こうして京都府下の各村落に於いては、大礼という国家的祭礼への精神的動員が進められていくのである。京都は、朝廷・天皇との関連の最も深い地域であるという特殊性も存在するが、そうした関係を駕輿丁や雑役人、用材調達における由緒郷などを通して再確認することになる。また、用材調達過程に見られるように、各村落の祭礼（氏神信仰）が大礼と結びつけられている。これは、村落共同体意識の延長上に国家との一体性を喚起し、村落共同体と国家が結びつけられ、構成員の主體的な参加意識がかき立てられるという構造を作っているといえよう。また、一定の特権（酒肴料や絵符、特別拝観など）によつて、その意識はさらに高められるのである。

もちろん、京都府下に於いては、大礼準備の経済的効果も大きなものであった。こうした経済的効果もまた、一種の恩恵として受け取られたといえる。

第二節 大礼挙行に際して行なわれた諸行事

天皇の京都市啓と「奉拝」の群衆

すでに述べたように、天皇は、一月七日、京都駅に降り立つ。儀仗兵の立ち並ぶ中馬車に乗り、京都駅から烏丸通りを通つて丸太町通り、堺筋御門から京都御所に入る。奉祝の旗や花輪で飾り立てられた沿道には莫慮が敷き詰められ、奉拝者が群集する姿が、『記事』に収載された写真からもうかがえる。

また、一般奉拝者とは別に、七日から二七日にかけて、「御苑

内奉拝場入場証」を交付された各団体から、七日には一四五九人、一六日の行幸四〇九〇人、還幸二七六二人、一七日の行幸、三七四三人、一九日行幸二五〇一人、二二日還幸二四六二人、二四日行幸一二八六人、二四日還幸一五六二人、二五日行幸九七八人、二五日還幸九二〇人、二六日行幸一〇九二人、二六日還幸一四九九人、二七日還幸一四六二六人、が御苑内で天皇を奉拝している。「入場証」を交付された団体は、七日の行幸と二七日の還幸については、各種の公益団体（弁護士会・医師会・帝国農会など）や在郷軍人会・軍人後援会、各宗派の代表者・婦人部、新聞記者、外国との友好団体（日露協会や日仏協会など）などであり、さまざまな団体を包括している。また、篤志者なる項目も挙げられており、団体に属さない名望家層（三五〇〇枚配布されており、在郷軍人会や赤十字社に次いで多い）も網羅していると考えられる。さらに、外国人に対しても七六〇枚の「入場証」が配布されており、実際に二五〇名近くが入場している。

京都御所西側では、高齢者、学校職員生徒・児童の奉拝も行われている。高齢者については、後述の賑恤も行われているが、御所での奉拝もまた、高齢者に対する養老の行事の一つである。七日には、二〇五六人（同数の付添人）、二七日には一四三四人（同数の付添人）が参加している。学校関係では、文部省直轄学校（師範学校・中学校・高等女学校、実業学校など）の職員・学生生徒の壮大人が奉拝を許されている。京都府に於いては、尋常小学校（職員一名、児童男女各一名）、尋常高等小学校（職員一名、尋常生徒男女各一名、高等生徒男女各一名）、高等小学校（職員一名、児童男女各一名）、実業学校（職員数名と一・二年生は総代一名、三年以上は全員）、私立学校は学校規模に応じて斟酌して

決定、官立学校・府立学校・私立の専門学校・中等学校は七日と二七日に教職員とも半数ずつ（あわせて全員）、という形で割り当てられている。次代を担う学生・生徒・児童もまた、国家的祭祀に動員され、天皇への忠誠心をかき立てられることになったのである。

こうして、大札当日の一斉万歳（大札当日の一〇日正午、大隈首相が天皇の面前で万歳を述べると同時に全国で万歳を唱和する）のクライマックスを迎えるのであるが、その際の群衆の反応は、「同じ万歳を唱えるのなれば、陛下の親しく居ます御所に近づき奉りてこそと思う臣子の赤誠は、期せずして十日、京都御所付近に人の山を築いた。行幸道の堺町御門を中心として丸太町通り、烏丸通り、寺町通りなどの電車道の両側に食み出るほど詰め込み、その数実に無慮十五万、午後三時三十分、万歳の轟きが洛北の大気を動かして起こる」（大阪毎日新聞十一月一日号）というものであった。

一方では、各種団体を通して特権を付与することを通して民衆把握を行ない、他方、団体に包摂されない群衆に対しては、万歳のクライマックスを用意することによって、群衆意識と一体感を演出し、国家的祭礼への主体的な参加意識を促しているといえよう。

大札当日の諸行事

贈位・叙位・叙勲

「遺勲ヲ追懷シ幽績ヲ顕彰シ、以テ百世ノ下黎元ヲシテ其ノ功德ヲ景仰セシムル」ために贈位・叙位・叙勲が行なわれた。豊臣秀吉や三条西実隆など歴史上の人物が多く、その人選には、首を

かしげるようなものもあるが、新島襄（従四位）や山本覚馬（正五位）なども贈位されている。新島の場合は妻が、山本の場合は孫が位記を伝達されている。また、存生の人物として叙位されるものは、「実業教育其他公共事業ニ多年功労アルモノ」が選ばれている。朝廷との関係が重視されるとともに、近代化を担った人物が選ばれているところに特徴がある。

養老・賑恤

一月一日の大礼当日、天皇が総理大臣に沙汰書（「臺ヲ存シ耄ヲ問フハ人ニ孝ヲ教フル所以ナリ恵ヲ敷キ恩ヲ垂ル、ハ民ノ乏シキヲ濟フヨリモ先ナルハナシ茲ニ登極ノ初メニ方リ祖宗ノ遺範ヲ紹述シテ養老賑恤ノ典ヲ行フ其レ有司ニ諭シテ朕ガ意ヲ宣布セシメヨ」）を下す形で内帑金百万円が全国に頒賜された。内約四分の一は朝鮮（二〇〇〇〇〇円）・台湾（四八六〇〇円）・関東州（七〇〇〇円）・樺太（一〇〇〇円）などの植民地に分配されたが、京都府は、一六八〇〇円を頒賜されている。

養老の内実は、一〇〇歳以上に木杯一組と酒肴料一元五〇銭、九〇歳以上に木杯一個と酒肴料一元、八〇歳以上に木杯一個と酒肴料五〇銭である。実際に行うためには、高齢者調査が必要であったが、その際に、京都府は、「各人毎ニ生活ノ程度、配偶者ノ有無、疾病ノ有無、平素ノ飲食物及其多寡、歩行ニハ保護者ヲ要スルヤ否ヤ」なども調査しており、以後の賑恤の資料とされたと思われる。京都府下では、対象者が一〇〇歳以上一五人、九〇歳以上二四三人、八〇歳以上六七八人、総計七一四七人となっている。この支出には、賑恤金がそのまま使われたのではなく、賑恤金を基金として、特別会計の下に置き、公債や債券、郵便貯金、

銀行への預け入れとし、利子収入を「賑恤ノ資ニ充テ」ている。こうして「聖恩」は以後も継続されることになる。

木杯や酒肴料の授与は、大礼当日各郡市町村の役場において行われたが、式場には、郡区町村の名誉職、名望家、官職者などが参列し、小学校児童の君が代斉唱に続いて郡区町村長（若しくは代理）より「聖旨」を伝え下賜物を授与、その後児童の奉祝歌、一同の最敬礼という形で執り行われている。厳肅な雰囲気の下で行われたというが、ここでも、天皇の恩愛という意識の浸透が小学生にまで図られたことはいうまでもなからう。

地方饗餞

「慶ヲ頒チ驩ヲ共ニシ給フ聖旨ニ基ツ」いて、大嘗祭第一日当日（一月一日正午）に二条城での大饗とともに各郡市町村、陸海軍では地方饗餞が行なわれている。これもその事務は地方長官に委託されている。京都府では、内務次官よりの通達を受け、饗餞該当者の範囲を高等官及び高等官待遇者、有爵者、従六位勲六等以上、藍綬褒章受領者、緑綬褒章受領者、神仏各宗派の管長、門跡寺院住職在職判任官二等以上と同等待遇者とし、さらに、京都市の市会議員、知事の選定した名望家二〇名、府農会長、商業会議所会頭、弁護士会長、中学校・高等女学校以上の公立学校校長、府医師会長、済生会寄付金一〇〇〇円以上完納者、地方森林会議員などが選定されている（陸海軍は別に各駐屯地に饗餞場を設けて実施）。いわば、地方名士・名望家草を網羅する形で饗餞が行なわれているといえよう。

地域の記念行事

こうした国家主催の行事に対し、各地域でも様々な記念行事が行われている。主体になるのは、学校と青年団である。中学校以上の学校では、提灯行列や運動会、講演会、行進を行うなどのデモンストレーションが、大礼期間中に行われている。小学校に於いても同様に提灯行列や旗行列、講話、運動会植樹が行われている。また、農山村の小学校では、青年団と行事を共催しているところも多い。将来を見越した事業としては、記念植樹なども行われているが、奉安殿の設置や校門の設置、青年会館や公会堂の建設も行われている。もともと一般みられるのは記念図書館の設立である。小学校や町村の図書館設立・増設はこの時期一種のブームとなっている。

恩赦

「朕大礼ヲ行フニ当リ普ク仁慈ヲ布キ以テ朕力福慶ヲ頒タムコトヲ願ヒ有司ニ命シテ恩赦ノ事ヲ行ハシム」として、京都監獄関係では一〇九一人、宮津分監内で一六九人が減刑されている。これは古来からの恩徳のある支配者のイメージを継続するものであり、かなりの規模で行われているといえよう。

中央での祭礼と記念事業と並んで、地方・地域に於ける事業が盛んに行われているのは、まさに国民総動員での国家的祭礼として大正大礼が行われたことを示しているといえよう。また、上からの命令として行われた面は否めないとはいえ、国民自身の中にそうした国家祭礼を積極的に受け入れる素地があったことも事実であろう。

大礼関連行事

大正大礼は、一月二七日の天皇の東京還幸と、三〇日皇靈殿神殿親謁を以て終了するが、記念事業や関連行事はさらに続けられることになる。

式場拝観

「大礼御式場跡ヲ開放シテ一般臣民ニ拝観セシムルコトハ国民教化ノ上ニ多大ノ効果アリ、就中生徒児童ニ及ホス感化ノ偉大ナルハ今更喋々セサル所ナリ」（『記事』上、二四〇頁）との位置づけで、一月一日から京都御所と二条城が一般に開放されている。多い日には数万、少ない日でも数千人の人々が拝観し、翌年四月三〇日までに、御所及び大嘗宮は二六五八九六九人、二条城が二五二五九二三人、計五一八四八九二人が拝観している。人々の関心の高さがうかがわれる。

また、一月一日からは歴代天皇の宸翰展も行われ、参観者が多かったため、三〇日までの予定が、一週間延ばされるなどやはり高い関心が存在していた。

建物・調度品下賜

大礼に使用された建物の多くもそのまま移築若しくは解体して用材を下賜するという形で市町村、学校（府立・郡立・小学校其他）、青年会、慈善団体、在郷軍人会などに下賜されている。

記念植物園

京都府では、大礼記念の博覧会を計画し、用地買収まで行われていたが経費調達が出来ず（大半を公債でまかなう予定だったが、

許可が下りなかった）、三井八郎右衛門（三井家総代・男爵）から二五万円の寄付を受け、維持基金を運用して、利子によって植樹園を建設することとなった。

こうした下賜や記念事業は、大礼の記念事業を一過的なものに終わらせず、永続化することを目的としたものであるといえる。

おわりに

大正大礼は、国家的行事・祭礼として華々しく挙行された。大正天皇個人としては、質素な形で行うという希望を持っていたというが、そうした個人の感傷は許されるべくもなかった（註2）。日本資本主義の発展と社会状況の変化の中で、一方で、家父長的な天皇制支配の強化が図られるとともに、資本主義化と大衆化された社会という新たな社会状況に対応して国民的な一体感を構築する必要があった。そのためにも、大々的な規模での祭礼が挙行されることが必要だったのである。大礼という前代未聞の大デモンストレーションの中で、養老・賑恤・恩赦などの古い形の支配者の恩恵賜与を通して、天皇の父性が強調される。また、大礼の準備過程を通じて、民衆を組織化し、共同体意識を国家規模のものにすると同時に、主体的な参加意識を高揚しようとしている。大礼自体は京都で行われたとはいえ、一斉万歳や地方饗餞、学校、青年会などの記念行事は全国で行われている。その内容は大同小異であった。全国で同じ行事をとにもすることを通して、国民的な一体感を作り上げることを目的としていたことは明らかである。

大礼の全過程を通して、国民の一体化と国家共同体への主体的参加の意識の高揚がはかられた。折しも、第一の臣民である首相は大隈重信であった。青年君主とそれを補佐する民衆的首相という構図は、大衆化しつつある日本社会にとって実に魅力あるものと映ったのではなからうか。

註1 中島三千男「天皇の代替わり」を考える（岩井忠熊・岡田精司編『天皇代替わり儀式の歴史的展開―即位儀と大嘗祭―』、二九三頁）は、「踐祚とは、祚を踐むということで即位とまったく同じ意味である。天皇の即位の儀礼は政治的な儀礼で一種のデモンストレーションであり、いわば「おれが王だ」と被支配者を威圧する効果を狙ったものである。そして、国家規模が大きくなればなるほどデモンストレーションのための装置も必要になってくる。そのための準備期間も必要になってくる。しかし、王位を空白にするわけにはいかない。あまり期間をおくわけにはいかない、そこでとりあえずただちに即位する儀式と、いわばショーとして大規模に行う即位の儀式とに分けたわけである。つまり、踐祚は前の天皇が死んだあと、また前天皇から位を譲られたあと、間髪をいれず王位に就く儀式であり、そうしたうえであらためて仰々しくデモンストレーションを行うのが即位礼なのである」としている。

註2 「大正天皇は、大正三年段階から大礼の簡素化をたびたび主張していた。したがって一連の盛大な儀式・記念行事・事業の数々は大正天皇にとつては本意だったかもしれない。しかし、たびかさなる戦勝や植民地の拡大によりアジア有数の強国となったと自他共に考えられ、かつ大衆社会化が進行しつつある「帝国」の君主たる天皇の即位儀礼が、諸外国や自国民に強い印象を与えるような盛大なものとなり、記念行事や事業が数多く行われるのはむしろ当然のことであった。」（古川隆久『大正天皇』、

戸 田 文 明